

招く骸骨

野村胡堂

—

「親分、笑っちゃいけませんよ」

「嫌な野郎だな、俺の面を見てニヤニヤしながら、いきなり笑っちゃいけねえ——とはどういうわけだ」

銭形平次とガラツ八の八五郎は、しばらく御用の合間を、こう暢気な心持で、間抜けな掛け合い喰ばなしのような事を言っているのが、何よりの骨休めだつたのです。

「親分にお願いしてくれ——って言うんだが、化物退治じゃねえ」「化物退治は洒落しゃらくれているね。場所はどこだい」

「金沢町の升屋なんで」
「両替屋の升屋かい」

「そうですよ。——升屋のお内儀が、銭形の親分さんの御機嫌の宣い時、そつとお願いして見てくれ。詳しい事は、いずれお目に掛つてお話するけれど——つて

「馬鹿だなア。岡つ引に化物退治を頼む奴があるものか。——そんな口なら、岩見重太郎の方へ持つて行くが宜い」

銭形平次は、こんな事を言うのです。

「その岩見重太郎つてえのは、どこの岡つ引で？」

「ハツハツハツハツ、こいつは秀逸しゅういつだ。岩見重太郎が驚くぜ、岡つ引と間違えられちゃ」

「だって、あっしはまだ、岩見重太郎なんて野郎に逢つたこともありませんよ」

「そうだろうとも、俺も逢ったような気はしねえ」

「へッ、呆れたもんだ」

どこまで行つても話は軌道レールに乗ります。

「だがね八。升屋には一体どんな化物が出るんだ」

平次はようやく真面目になります。化物退治も暇なときには満更でないと思つたのでしょう。

「化物だか幽霊だか知りませんが、升屋では三月ほど前から変なものが出て、奉公人が居つかなくて困るそうですよ。主人の由兵衛も心配はしているが、商人に似合わぬしつかり者で、こんな事が世間へ知れちゃや、商売にも障るだろうし、神田草分けと言われる升屋の暖簾のれんにも関わるから、なるべく人に聞かせたくねえ——とこう言うんだそうで」

「成程。升屋の主人の言いそうな事だ」

「——多分狸か狐の悪戯わるさだろう。捕つかめえた者には褒美をやると言うんだそうで」

「フレーム」

「ところが、その化物は、おそろしく人見知りをして、主人夫婦と一番番頭の金蔵が寝泊りをしている、奥の離室へは出るが、多勢の奉公人のいる、店の方へは氣振けぶりも見せないんだそうですよ」「贅沢な化物じやないか」

「主人の由兵衛はあるの気象だから、お内儀が閉口して、店の方へ行つて休もうと言つても、どうしてもきかねえ。——子供だましの化物騒ぎに脅おどかされて、七年間も寝起きをした離室を明け渡すのは、町人の恥だてんで——」

「町人の恥は嬉しいな」

平次はまだ少し茶化しながら、それでも次第にこの話に入れられる様子です。

「一体、この世の中に、化物や幽霊はあるものでしょうか、ないものでしょうか、親分」

「俺は化物や幽霊に附き合いはねえ。そんな事は横町の手習師匠にでも聞くが宜い」

「でも、出るのは確かですよ。お内儀は何べんも見たって言うんだから」

「出るだろうよ。俺はそのエテ物に、足が二本あるか、四本あるか、知りたい」

「じゃ、升屋へ乗込みましょう。主人もお内儀も喜びますよ」「止そうよ。化物退治は気が乗らねえ。が、主人かお内儀に逢つたら、これだけの事を言っておくが宜い。——エテ物は離室を明けさせたい様子だから、一晩店へ引揚げて、様子を見るが宜からう、——用心が悪いと思うなら、あまり物を怖がらない番頭を一人泊めるように——と

「そう言つて来ましょう」

ガラツ八の八五郎は、そのまま飛出しました。この馬鹿馬鹿しい化物騒ぎが、平次が今まで経験したことのないほど、不気味な恐ろしい事件の発端になろうとはもとより知る由もありません。

二

翌る日、升屋の主人由兵衛は、お内儀のお鳴つたといつしょに、錢形平次の小さい家を訪ねて來ました。

「折入つて親分にお願いすることがあつて、もつたいないが、明神様へ朝詣りということにして参りましたよ」

由兵衛は苦笑します。年輩三十五六、デップリ脂の乗つた、柔和な顔立ちも、穏やかなうちに品のある物言いも、神田の草分け、江戸両替番組世話役の貫禄に申分ありません。

「これは、升屋の旦那。化物が暴れ出しましたか」

平次は何か予期している様子です。

「それなんですよ、親分。私はもう怖くて怖くて、あんな家に住む気がしません」

お内儀のお鳴はつつしみを忘れて、夫の後ろから口を添えました。三十そこそこのでしそうが、昔左棟ひだりづまを取つたことがあるとかで、抜群の年増ぶりです。少し青白い面長、商売人上りらしい活々した大きい眼、歌舞伎役者のような表情的な身のこなしなど、妙に病的な魅力を感じさせる種類の女でした。

「始めから順序を立てて仰しやつて下さい」

銭形平次はにこやかにそれを受けました。神経の尖り切つた女には、こうするより外に術てはありません。

筋を進める前に、少しばかり、その頃の両替制度と、升屋の家格を説明すると宜いのですが、話が固くなりますから、これはほんの概略がいりやくに止めておきます。

その頃、江戸の両替屋は六百軒と限られ、三十幾組に分れて、江戸の金融機関になつていたもので、その組織は非常に複雑を極めます。大別すると本両替ほんと銭両替ぜにとあり、資力の大きく、家格の良いのは、大名や商人の金融、金銀為替かわせなどを扱い、上納金の検査や、金銀相場立て、新旧貨幣の交換引揚げ、単純な両替すな

わち貨幣の交換まで、いろいろと仕事があつたわけです。

升屋は番組両替の世話役で、代々金沢町に住み、三井や竹原、中井、村田の本両替屋に次ぐ家格。すなわち金銀を店名の包封のまま通用させる、江戸九軒の大両替屋の一軒だつたのです。

先代は徳五郎と言いましたが、七年前、川崎へ行つたまま行方不明になり、持物は品川の海へ浮んでいたので、網船でも出して溺れたのだろう、ということになりました。

内儀のお鳶は一年孤閨こけいを守つた上、親類方の相談で、支配人をしていた、主人の義理の甥由兵衛に嫁合せあわ、升屋の身上は、小搖ぎもなく立つて行きました。その間に、子飼いの番頭の与市が、お鳶に気があつて大騒動をしたり、それからぐれはじめて、さんざん道楽をした揚句、贋金を使つて遠島になりましたが、事件が店の外で起つたのと、升屋の顔がよかつた上、相当以上の金を使つたので、店には何の疵きずもつかず、簡単なお叱りだけで事済みになつたことがあります。それももう六年前の出来事で、錢形平次も、徳五郎の失踪と与市の処刑を臚氣に記憶しているだけの事でした。

「この化物騒ぎは三月ばかり前からですが、どうにもこうにも、お話になりません。屋根の上へ石が降つたり、女共が雪隠せつちんへ行くと、箒で顔を撫で廻したり、髪の毛がサラサラと障子に触つたり——、毎晩怪談噺の仕掛けのような事が起るのです。あんまり馬鹿馬鹿しいから気にも留めずになりますが、家内が気に病んで、どうとう親分のお耳に入れたそうで——」

づけました。

「ゆうべは親分の言いつけなすった通り、私共夫婦だけ母屋おもやへ寝て、離室の方を番頭の金蔵に任せておきました。すると、夜中に得体の知れない者が忍び込んで、年寄の金蔵を、足腰の立たないほど殴って行つたんです。そんな荒っぽい化物は世の中にあるでしょうか、親分」

「化物の殴り込みというわけですね」

平次は苦笑しました。

「何しろ金蔵は、六十三という歳ですから、気だけは勝つていても、化物と組討ちをする柄じゃございません。縁側で眼を廻しているのを下女が見つけて、一応の手当てはしましたが、何を訊いても夢のようだと申します」

「雨戸は？」

「一枚はずれておりました」

「化物もさすがに節穴からは通れなかつたでしょう」

と平次。

「馬鹿馬鹿しいと思いながらも、これじややりきれません。女房の臆病に附き合うようですが、親分の知恵でも拝借したらと思いましてね」

由兵衛は仕様ことなしに笑つております。

「私が行つて見るのはワケもありませんが、岡つ引の姿を見ると、鳥が逃げてしまいます。明神様には済まないが、朝詣りということにして、ここへそつと寄つて下すつたのは、宜いことでした。——ところで、お店の奉公人は、幾人位ありますか？」

「金蔵を始め、番頭手代小僧まで十七人、それに下女が三人、飯めし

炊きが一人

「多勢ですね。その中で、三月か四月前に来たのはありませんか、化物の悪戯の始まる頃——」

「私もその辺に気がつきましたが、生憎丸一年勤めているのが、一番の新米で、金蔵などは四十七年もいるそうです。——もつとも、この三月の出代りに暇を取るのや出すのは三人ほどありますが」

昔の奉公人は三月が出代り、それまであと十日とありません。「それじや、今晚は奉公人のうちで一番気の強いのを、一人だけ離室へ寝かして見て下さい。二朱か一分の褒美を出したら、進んで離室の番をしようと言うものがあるでしょう」

「又怪我をされると困りますが——」

「大丈夫ですよ、私も後でそっと覗きますから。——もつともこれは言っちゃいけません」

三

その晩平次は、お勝手口からそつと升屋の母家に忍び込みました。案内してくれたのは主人の由兵衛。子刻過ぎの店中は、さすがに寝静まって、コトリとも音がしません。

「離室へ寝てるのは?」

平次は廊下に立つてささやきます。

「治助——という男で

「強いんですね」

「平常は至つて弱い男ですよ、——褒美を一両出ますが、離室へ行つ

て寝る者はないかと言うと、誰よりも先に名乗つて出ました

「お店に何年くらいいるでしよう」

「二年くらいになるでしようか。二十七八の、よく働く男ですよ
主人の由兵衛はこう言いながら、離室の方へ案内します。真っ
暗な廊下を足^{あしきぐ}捜りで、馴れない平次には音を立てまいと思うのが
一と難儀です。

「この三月の出代りに、その男も出されるんでしょう」

「その通りですよ親分。よく働くには働きますが、身元が判然し
ないのと、人柄はよいが、仲間の受けがよくないので、三月には
帰すことになつております」

「化物が忙しくなつたわけですね」

「へエ――」

主人は判らないながら、平次へ相槌^{あいづち}を打つております。

「おや?」

由兵衛は立止りました。雨戸が一枚開いて、縁側には梅の蕾^{つぼみ}を
ふくらませる、柔かな風が吹込んでいます。
まだ月は出ませんが、庭には、搖ぐ^{ゆら}仄明^{ほのあか}り。

「シーツ」

平次は由兵衛の袂を押えました。ここで何か言い出されでは、
何もかもいけなくなつてしまします。

「治助は床の中にいない様子です」

「――」

平次はそれに応えず、黙つて外を指しました。

「あッ」

離室の裏、少し荒れた窓寄りの辺^{あたり}を、一生懸命掘り下げている

二人の人物があつたのです。

「黙つて」

平次は由兵衛の驚きを押えるのが精一杯でした。

「小さい方が治助です」

「一人は相棒でしよう」

「何を掘る積りでしよう?」

「シツ」

窓の外の二人は掘る手を休めて、腰を伸しました。土の上へ、横においた泥棒龜燈どろぼうがんどうの灯は、屏に反射して、覚束なくも二人の顔を照します。

治助というのは、なるほど三十には間があるでしょう。少し華著に見える男ですが、こんなのが案外な強したたかか者かも判りません。もう一人は四十前後、凄まじい青鬚あおひげで、頬冠こまいりを取つて汗を拭いたところを見ると、山賊の小頭が戸惑いして飛込んだ——と言つた男です。

「あとはもう楽だ。一尺も掘ると、その下は土蔵を壊した時の、壁土や瓦かわらや貫ぬきや木舞こまいが投げ込んであるというから——」

治助の声でした。

「——」

それを聴いた、由兵衛の顔は見物でした。

「何を呆れていなさるんで——、旦那」

平次はこう訊かずにはいられません。

「井戸を埋めたのは六七年前のことですよ。それを新参者の治助が知っているのはおかしいじゃありませんか」

由兵衛の言うのはもつともです。離室の窓の下、何の変化もな

い踏み固めた場所から、昔の井戸を捜し出すのは、いざれ仔細のことでしょう。

「縛つてしまいましょうか」

平次はこれ以上井戸掘を見ているのが馬鹿馬鹿しいような気がしました。飛出して縛り上げた上、二人の口を開かせ、それから井戸を掘つて見ても遅くはありません。

「も少し見ていましょう。——井戸はどうせ一間とはありません。二人で掘れば、二刻ともかかるないでしょう」

「二た刻？」

「何が出て来るか、楽しみじゃありませんか」

側に平次がいるせいもあるでしょう。由兵衛はすっかり落着いて、井戸の中から、金の茶釜ちゃがまでも出てくるのを見ていたい様子です。

四

治助が言つた通り、一尺ほどの下は木舞こまいやガラクタが主おもで、何のわけもなく井戸は掘下げられます。

「早くしようぜ。兄哥」

「心得てるよ。夜明けまでに掘り出して、裏木戸からズラかりや宜いだろう」

二人は予かねて用意した道具で、骨身を惜まず働きました。

由兵衛と平次は、息を殺してその作業を見守りました。丑刻やつが鳴り、寅刻ななつが鳴ると、治助はさすがに疲れた様子ですが、外から呼んだ青髯の相棒は、労働には馴れている様子で、ほとんど疲れ

を知らぬ人間のように、根気よく掘りつづけます。

「変なものがあるぜ、兄哥、灯を見せてくれないか」

井戸の中で、ガラクタを取りのけていた青髯が言うと、

「それよ——」

上から治助が、がんどう龕燈の灯先を向けてやりました。

「わツ」

「た、大麥ツ」

龕燈を差し向けた治助も、井戸の中の青髯も、一ぺんに声をあげます。何様、容易ならぬ物を見たのでしょうか。

「兄哥、一人で逃げちゃ殺生だ。——待ってくれ」

「逃げるものか、——そんなものは片づけて、その下を見るが宜い」

「俺はもう御免だ。代るから、こんどは兄哥が入つて見てくれ」

青髯はとうとう、たまりかねて井戸からはい出します。

「今更そんな気の弱い事を言つちや困るじやないか。大事な品は多分その下にあるんだろう。ノコノコ這い出して来やがると、無事じやおかねえよ」

治助の手にはキラリと何やら光ります。多分脅かしのあいくち匕首でしうが、こうなると、青髯の凄まじい男よりは、華奢な治助の方が、遙かに悪党らしい様子です。

「兄哥、勘弁してくんna。俺はもうイヤだ。——大きな声を出すぜ」

「馬鹿野郎。——仕様のねえ人足だ。今引上げてやるから、待つて

いろ」

そう言いながら治助は、闇の中にそつと匕首を構えます。井戸

の中から上って来る相棒を一と突きにして、その臆病な口を封じた上、自分で中の秘密を捜る積りでしょう。

がしかし、こうなると平次も放つておけません。由兵衛と顔を見合せると、

「御用ツ」

パツと飛出しざま、治助の利腕(ききうで)を殴りました。

「あツ、何をしやがるツ」

ヒ首を叩き落されて、拾いにかかると、加勢に飛込んだ主人の由兵衛、咄嗟(とっさ)のまに、そのヒ首を蹴飛ばします。

「神妙にせい」

平次の馴れた手は、早くも治助を取つて押えましたが、同時に、井戸から飛出した青髯、由兵衛をドンと一と突き、疾風の如く裏木戸から飛出すのを、

「どっこい、待つていたぞ」

闇から生れたようなガラツ八の八五郎、一流の糞力(くそちから)に、青髯の後ろから、無手と羽搔締にしてしまいました。

五

「何だ何だ」

「又化物が暴れ出したのか」

「それ行つて見ろ」

母屋から五六人、心張棒、天秤棒(てんびんぼう)から、長押(なげし)の槍まで持出して、

バラバラと飛んで来ました。夜は明けかけている上に、多勢となると、馬鹿に威勢がよかつたのです。



「おや、旦那

「平次親分も」

そこに展開された、ふしぎな事件に、飛出して来た奉公人達も、しばらくは呆気に取られるばかり。

「大急ぎで灯を持って来てくれ

主人の由兵衛はようやく我に還^{かえ}ると、さつそく指図役に廻りました。大立廻りの時龕燈は消えて、薄明るい暁の光りでは、井戸の中までは見えなかつたのです。

「へエ――」

持つて來たのは提灯と手燭と、有明の行燈、掘り下げた井戸の三方からいっぺんに差出されました。

凄まじい好奇心が、口火を点じた煙硝^{えんしょう}のように燃え上がります。

「あッ」

驚きの声が、多勢の口を衝いて出ました。井戸の底にあるのは、——燐さんたる大判小判?——いやそんな生優しいものではあります。薄黒い着物に包まれた骸骨、——黄灰色こうかいろに濁つた、世にも浅ましい人間の死骸だつたのです。

「わッ」

番頭達も、主人の由兵衛も、思わず彈き飛ばされたように飛び退きました。先刻井戸の中の青鬚が悲鳴を挙げて這い出そうとしたのも、全く無理はありません。

「誰か手を貸して貰いたいが」

さすがに平次は一番落着いておりました。一とわたり驚きの納まるのを見ると、こう言いながら、集つた人数の顔を読みます。

「——」

誰も返事をする者はありません。

「八、どうだ」

「やりますよ」

ガラツ八はさすがにいやとは言いません。

「梯子はしごが一挺、蓮むしろが一枚、——仏様を乗つけて四隅へ繩を通して吊り上げるんだから、丈夫なのが宜い」

平次の言葉に勢いを得、番頭達はようやく動き始めます。

井戸から引上げた死体は、想像以上に不気味なものでした。肉にく漿しょうと泥とに、着物は生昆布なまこんぶのように濡れて、縞目も判りませんが、左の胸へは脇差が一本、深々と突つ立つて、赤鑄あかさびに鑄びてあります。

肉は殆んど落ちて、乾いた壁や土や木舞の中に埋まっていただけに、申分のない曝さらされようですが、その代り、人相の鑑定の付

けようはありません。

「かなり大きな男には違いないが——さて、誰だろう」

平次は四方を見廻しました。恐ろしい沈黙と動乱の世界も、少しづつ明るくなつて、不気味な骸骨の眼が、みんなを睨み据えているようでもあります。

「心当たりがあつたら言う方が宜い。こんなにされちや誰だつて浮ばれまい。それ、真っ黒な眼がみんなを見ているじやないか」

平次はつづけて言いました。

「錢形の親分さん、——この死骸が誰か、私にはよく解ります」
身体の痛いのを我慢して、この時にようやく這出して来た老番頭の金蔵です。

「番頭さんか、お前さんは年頭としがしらだ、若しやと思う事があつたら言うが宜い」

「若しや——どころじやございません。これは七年前に行方知れずになられた、先代の大旦那に相違ありません」

老番頭金蔵は言い切りました。

「間違いはあるまいな。番頭さん」

「それはもう、先代の旦那様のお守りをしながら奉公した私で御座います」

「証拠はあるだろうね」

「第一、この胸に刺した脇差は、行方不知になつた時差していなすつた品でございます。それから、着物に凝つた方で、——この古渡唐棧こわたりとうざんは、汚れてはおりますが、よく存じております。それに、背恰好、左足首に骨まで通つた切瘡——これは若い頃の悪戯わるさの祟りで、お守の私がうんと叱られました」

「」

「それに、この井戸を埋めたのは土蔵を建て直した年で、ちょうど七年前、先代の旦那が行方不知になつた年でございます。——浅い井戸で水が悪くて使わずにいたのへ、職人が邪魔な物を投り込むので、与市——これは遠島になつた番頭でございますが、その男が言いつけて、とうとう埋めてしましました」

金蔵の思い出はそれからそれと涯はてしもありません。

「先代の旦那が行方不知になつた時、この井戸は見なかつたのかい」と平次。

「一応は覗きましたが、半分埋まつた井戸の底を掘る気にはなりませんでした。何しろ、品川の海から、旦那の脇差の鞘だの、腰こし下さげだの、下駄だの、いろいろな物が見つかつたので——」

「品川の海から身についた品物が上がつたのに、七年経つてから、屋敷内の井戸から死骸が出たのはおかしいじやないか」

「へエ——」

平次の鋭い疑問も、老番頭には何の意味もない言葉でした。

「旦那。どんなものでしよう

平次はさり気ない顔で由兵衛を見上げました。

「私には何にも解りません

先刻まで、井戸を掘るのを、あんなに面白がつて眺めていた由兵衛の顔は、鉛なまりのように真つ青です。

「先代が行方知れずになつた頃、旦那はどこにいました

「ここにいましたよ」

平次はそれつきり口を緘つぐみました。先代徳五郎の身代を継いだ

上、その美しい後家^{ごけ}と一年後には一緒になつた由兵衛は、罠^{わな}の中に陥込んだ獣のよう^に、あがきようのない、恐ろしい境遇におかれることを自覚しないわけには行きません。

川崎へ行つたきり帰らずに、品川の海で死んだことになつておればこそ、その日一日店から動かない由兵衛には、何の疑いも掛らなかつたのですが、先代徳五郎が、金沢町の自分の家の、庭で殺されたとなると、話がまるつきり違います。

由兵衛が青くなつたのも、頓^{とま}には口も利けないのも、全く無理のないことでした。

六

「親分、何だつて由兵衛を縛らなかつたんで？」

治助と青鬚を番所へ引いて行く途中、たまりかねて八五郎は訊きました。

「七年前のことだ。あれだけの証拠^{じゆく}じや縛れない。——それに、こいつらが井戸を掘つている時、由兵衛は平気な顔をしていたよ。——いや、平気どころじやない、面白がつて眺めていたくらいだ。

井戸の中に自分の殺した死骸があると知つていちや、どんなに大膽な人間でも、あんな暢氣^{のんき}な顔は出来るものじやない」

「成程ね」

「それに、この二人を縛る時は手を貸して、俺の危ういところを助けたり、灯を番頭の手から取つて井戸を覗いたり、——どうしても下手人^{げしゅにん}と思えない事をしている。あの井戸が窓の下にあるのに、離室に平気で五六六年も寝起きをしているのもおかしいじやな

いか

「へエー。そう言つたものかな」

ガラツ八はまだ腑に落ちない様子ですが、平次にそう言われる
と、強いて抗うほどの知恵もありません。

「安心するが宜い。升屋は万両分限で、神田一番の両替屋だ。身
に覚えがあつてもなくとも、由兵衛は逃げも隠れもすまい。——
その上、あれだけの女房があつちや」

「好い女ですね、親分。元は芸者だと言うが」

「左手の小指が半分から先ないだろう。——柳橋から出でいる頃、
起誓代りに切つたのさ。一生懸命隠してはいるが——」

「へッ、へッ、お安くねえ内儀だ」

ガラツ八はペロリと舌を出しました。

番所へ行くと、事件があまり変っているのと、升屋の家格が大
袈裟けさなので、奉行所へ出かける前、与力の 笹野新三郎が見廻つて
来ておりました。

「平次、大変な事があつたそうだな」

「お早う御座います。——全く大変なことで、あつしも途方に暮
れました。死体が見つかつたんですから、下手人を捜さなきやな
りませんが、何分七年も前の事じや——」

「まあ、諦めたもんじやあるまい。その井戸掘りをやつた、二人
を調べて見よう」

「それよりほかに工夫も御座いません」

「当つて見るが宜い」

笹野新三郎は、鷹揚に頷いて上がり框かまちに腰をおろしました。
「手前達は、何だつてあんな仏様を掘り出したんだ。お上には御

慈悲がある、手数を掛けずに言つてしまつたらどうだ」

八五郎に縄尻を掴ませて、平次は二人の前へ立ちました。町奉行の御白洲は型ばかりで、下調べは大抵こうして埒らちを明けたのです。

「金があると思いましたよ。——何しろ小判で三千両と言うから

——」

青髯の男は、思いのほか軽口で、ペラペラとります。

「黙つていろ」

治助はジロリと凄い三白眼さんぱくがんを見せました。

「兄哥あにき、こうなつちや言つた方がいいぜ。三月越しお化けの真似をした上、ちよいと井戸掘りをやらかしたほかに、大した悪事もしなかつたじやないか」

青髯は他愛もありません。

「言つて宜きや、俺が言うよ。——」

「それは良い料見だ。なア治助、島帰りはそれ位の度胸がなきやア、悪党仲間へ顔向けがなるめえ」

「ヘツヘツ、よく御存じで、錢形の親分」

「額の入墨を、刃物で切り取つてあるじやないか。子供の時庭で転んで、切石に額を打つつけた——とても言うんだろう」

「成程ね。親分は見透しだ。みんな器用にブチまけましよう

治助はすっかり諦めた様子で、ボツボツ語り始めました。

「打れたり叩かれたりして、口を割るあつしじやねえが、 笹野の旦那と錢形の親分が揃つちや、重忠様が二人だ。不貞腐れるだけが野暮でしょうよ。——なにを隠しましよう、あつしはお小姓の治郎助で——」

「何？ お小姓の治郎助？ それが手代に化けて、二年も我慢したのか」

平次が驚いたのも無理はありません。お小姓の治郎助というのは、武家の出だとも、役者崩れだとも言われる、名題の悪党で、海道筋を繩張に、宿から宿と荒し廻る忍しおびの名人だつたのです。

「だらしのねえ恰好で、お目通りをして、面目次第もありません。——お小姓の治郎助が、井戸掘りの真似をしたんだから、笑つてやつて下さい。実は親分」

「——」

お小姓の治郎助の白状は怪奇を極めました。駿府で捕つて、三宅島へ流されたのは四年前、そこで端なくも、五年前に贋金使いで島へ流された、元の升屋の番頭、与市と懇意になつたのが、そもそもこの事件の発端ほつたんでした。

それから一年ばかり経つて、与市は、傷寒しようかんで死にましたが、臨終という時治郎助を枕辺に呼んで、

——江戸へ行つたら、金沢町の升屋へ入り込んで、離室の窓の前にある、古井戸を掘つて見るが宜い。一間ばかり掘ると小判で三千両の金が出て来る筈だ。——それは新鑄しんちゅうの通用金と、旧鑄の金を換える時、そつと用意した贋金と摺り換え、眞物の小判を三千両も貯めて、井戸の底に隠したのだ。俺はもう助かる見込みはない、これを言わないと心残りがして、冥土よみじの障りになる。形見にやるから、掘出して遣つてくれ——。

と、こう言つたのです。

屋へ入り込んだが、どうしても井戸を掘る隙がねえ。そのうちに素性がバレそうになつて、この三月にはお払箱と決つたから、大急ぎでこの青髯の竹の野郎を仲間に引入れ、化物騒ぎをして離室を明けさせようと企らんだが、主人の由兵衛は確り者で、少しも怖がらねえ。——昨夜はようやく井戸を掘つて、大願成就じょうじゅと思うとこの始末だ。錢形の親分、面目次第もないが、これが掛値のねえ白状だ。お小姓の治郎助も、あれほど馬鹿にされようとは思わなかつたよ」

少し不貞腐れますぐ、この言葉に嘘があろうとは思われません。 笹野新三郎と錢形の平次は、何とはなしに顔を見合せました。

「平次、井戸の中には、確かに金はなかつたろうな」

と 笹野新三郎。

「それはもう間違いは御座いません」

「すると、島で死んだ与市とか言う番頭が、治郎助を使って、井戸を掘らせたのは?」

「死体を掘り出させるためで御座いましょう」

「何のためだ」

「讐かたき」を討つためでございましょう。升屋の先代を殺した下手人に怨みがあつて、それに思い知らせるために——

平次の明察は次第に蘇よみがえります。

「そんな手数な事をするより、——井戸の中に死体がある。下手人は誰——と言つてしまつた方がよいではないか」

「死体があると言つちゃ、治郎助が骨を折つて出してくれません。

——それに、島でそんな事を言つたところで、賛金使いの兎状持の言うのを誰が真に受けましよう」

「成程、そんな事もあるだろう。——与市が怨んでいる者と言うと——」

「与市は金蔵に次いで店中の福利きで、内々升屋の身上じんじょうを覗つていた上、主人あるじの女房お房のお鳴お鳴にも気があつたそうです」

「すると？」

疑いは又もや、当主由兵衛の方へ、北を指す磁石じしゃくのように、極めて自然に、宿命的に向いて行きます。

「だから親分、あの時由兵衛を縛つたら——って言つたじやありませんか」

八五郎は歯痒じゆぎやくそうでした。

「手前てめえは黙つていろ」

平次は何時もに似氣なく不機嫌です。

七

その日の夕方、ガラツ八は鉄砲玉のように飛んで来ました。

「親分、大変だ」

「何が大変なんだ。こんどは井戸から幽霊でも出たのかい」

平次は瞑想から呼び覚されて、この日本一のあわて者を迎えた。

「三輪の万七親分が乗出したんで」

「それがどうした」

「驚いちやいけませんよ。親分、内儀のお鳴お鳴を縛つて行きました

ぜ」

「何だと、馬鹿野郎」

平次はガラツ八を叱り飛ばしているのでした。

「お薦を縛ったのは、あっしじやありませんぜ。三輪の万七とお神楽のかぐらの清吉で——」

「あの女が元の亭主を殺したと言うのか」

「何だか知らねえが、骸骨を入棺にゅうかんしようとする、されこうべの口から、噛み切った小指の骨がポロリと落ちたんで——」

「あッ」

「驚くでしよう親分。——内儀の左の手には小指がねえ、——ちょうど親分のアラ搜しにやつて來た万七親分は、それを聴くと直ぐ内儀に縄を打つた」

「よしつ、そんな馬鹿な事があるものか。もう一度行こう」

平次はガラツ八を追つ立てるよう、升屋へ飛んで行きました。升屋の中は恐ろしい事件の続発に怯えて、滅入ったような陰惨さ。

「死骸の口から出た小指というのはここにあるだろうね」

平次は挨拶も忘れて、主人の由兵衛に訊ねました。

「これですよ、親分」

指したのは、経机きょうづくえの上の小さい箱に入れた紙包かみづくみ、——心忙しく

ひろげて見ると、

「何だ。こりや女の小指じやねえ」

平次は少し拍子抜けがした様子です。

「私もそう思いました。それに、薦が指を切つたのは、柳橋にいる頃で、もう十年も前のことです。三輪の親分にそう言つても、耳に入れてくれません」

由兵衛は平次の言葉に勢いを得て、急にこんな事を言うのです。

「心配なことはありませんよ。お内儀さんは直ぐ返されるでしょう。——が、他にこの家に、指のない人はありませんか」

平次はその辺に寄つて来る番頭達を眺めました。

「私はこの通りですが——」

由兵衛は十本満足に揃つた、自分の指を見せながら続けました。
「ね、金蔵どん、——三宅島へ流された与市は？」

「左様でございます。私もそれを申上げようと思つておりました。与市は先代の旦那様が行方不知しれずになつた頃、癰瘍ひょうそうをやつたとか言つて、外科で指を切つたように思いますが」

「そんな事があつたね」

と由兵衛。

「どの指でしよう？」

「右手の薬指でしたよ。——書き物に不自由はないが、箸はしを持つには困るとか言つておりましたから」

「与市は左利きでしたか」

「そんな事はありませんよ」

金蔵の記憶はたしかでした。

「念のため、もういちど治郎助と竹に逢つて、与市の様子を聴いて来ましょう。右手の薬指というと少し話が變つてくる——旦那は番頭さん達と、御通夜おつやをして待つていて下さい。帰りにはお内儀さんも一緒かもわかりませんから」

平次は八丁堀へ飛びました。由兵徳と金蔵だけでなく、島で与市に逢つた、治郎助からも指の事を確かめておきたかったのです。

「親分。あの指が与市のじや、無駄骨折りじやありませんか」

「——」

「下手人が島で死んで、からかい面に死骸を掘らせたんでしょう」

ガラツ八は平次のうしろから、こんな事を言います。

「黙つていろ。筋はこれから面白くなるんだ」

「へエ——」

八

平次が八丁堀から升屋へ帰ったのは、その晩の丑刻過ぎやつでした。昨夜も一睡もしないのに、大した疲れた様子もなく、手掛けた事件を、一気に片づけようとするのでしょう。

お鳴は手続きが遅れて、今晚連れて来るわけには行かなかつたそうですが、——

「その代り、素晴らしい事を聞込みましたよ」

平次はこう言いながら、少し有頂天に手を揉んであります。

「どんな話です。親分」

と由兵衛。

「治郎助が言うんです——与市は苦しい息の下から、——井戸の中には升屋が引くり返るような物があるが、あんまり吃驚びっくりしてぞんざいに見るな。その品の下には、もう一つ、人一人の命にかかわる品があるぞ。大事な大事な証拠だ。そいつを忘れるな。あん畜生に思い知らせる品だ——つてこう言つたんだそうですよ」

「——」

「升屋が引くり返るような品というのは、この棺に納めた先代主人の骨に決っていますが、——人一人の命に関わる大事の品、あん畜生に思い知らせる証拠の品——と言うのは、いつたい何で

しょう

「——」

「多分、下手人の落した、煙草入とか紙入のようなものでしよう。どうせ夜じや判るまいから、明日の朝捜すことにして、それまで私は、家へ帰つてひと寝入りして来ます。さようなら、お休みなさいまし」

平次は一人言のように言つて、升屋から飄然^{ひょうぜん}と立去りました。

九

それから一刻ばかり後。

升屋の店中はすっかり寝静まつて、先代主人^{あらじ}の骸骨を納めた、離室の一室だけが明々と灯つておりました。

平次が帰ると間もなく、雇人達はみんな下がつて、残つたのは元気を恢復した老番頭の金蔵一人、これも薄寒いのと淋しいので、夥しい徳利を並べた後は、他愛もなく眠りこけて、庭先にどんな事が起つているかも知りません。

フト黒い影が、離室の雨戸を離れると、掘荒した井戸の方へ、静かに近づいているのです。

時々足下^{あしもと}の大地を丸く照すのは、ゆうべ治郎助達が持つていた、泥棒龜燈^{どろぼうがんどう}でしよう。

黒い影がようやく穴の口に近づくと、要心深く踞んで、泥棒龜燈を古井戸の底へ差向けました。

「あツ」

黒い影はのけ反らんばかりに驚きました。がしばらくすると、招く骸骨

氣を取直した様子で、もういちど井戸の底を覗いたのです。

中には、ゆうべ見た通り、——濡れ腐った着物に包まれた、凄まじい骸骨が一体、寒々と横たわっているではありませんか。

「——」

黒い影は全身を顫ふるわせて、バリバリと歯を噛み合せました。凄まじい恐怖を我慢している様子です。

「由兵衛」

どこからともなく、か細い不気味な声。

「馬鹿な」

黒い影は超人的な勇氣を振り起して、もういちど井戸の中を覗きました。こうして自分の妄想もうそうを取扱おうとしたのでしょう。が、底に横たわった骸骨はそのまま元の姿で、何の変りもなく、——いや、何の変りもなければ、黒い影は勇氣と理性を取戻す道もあつたでしょうが、このとき骸骨は、黄灰色こうかいしょくに曝さられた手を挙げて、ユラユラと井戸の上から覗く黒い影を招いたのです。

「由兵衛——来いよ」

黒い影は、その声を聞くと見事に引っくり返りました。

「わーっ、勘弁してくれ。——私が悪かつた」

這い廻る黒い影の上へ、

「御用ツ」

いつの間にやら平次の手はかけられていたのです。

「親分、もう上がつても宜うがすかい」

井戸の中からはガラツ八の八五郎。骸骨の紙型を貼りつけた黒い巾きんを脱いで、ノソリと上がつてきました。

「八、御苦労だつたな。お蔭で下手人が捕まつたよ」

「いや驚いたの驚かねえの」

ガラツ八はペツペツと唾^{つばき}を吐きながら、身体に巻きつけた、異様な装束^{しょうぞく}を脱いであります。

×

下手人は言う迄もなく由兵衛。

「指を噛み切られたのは与市なのに、下手人が外にあつたのはどう言うわけでしょう」

翌朝、疲れが少し脱げると、ガラツ八はもう絵解きをせがみます。

「先代の徳五郎を殺したのは、由兵衛と与市と相談の上だ。由兵衛は升屋の身代を継ぎ、与市はお鳶^{つた}を手に入れる積りだったが、由兵衛に両方とも取られた上、賄金^{にせがね}の一件がばれて島へ送られた。その時与市が主人殺しの事を言わなかつたのは、賄金の方は確かな証拠がなかつたそうだから、島で神妙に勤めさえすれば、許されて江戸へ帰る見込みもあるが、主殺しは間違いもなく磔刑^{はりつけ}だ。知らん顔で納まつてゐる由兵衛が癪にさわるが、これだけは与市も白状する気がなかつた」

「成程ね」

「で、死ぬ時、治郎助を騙^{だま}したのは、由兵衛への嫌がらせで、うまく行けば叔父分殺しという重罪を露見させてやろうと企らんだのだ」

「」

「七年前のその晩、主人の徳五郎が川崎から夜になつて帰つて来たのを、庭で刺殺^{さしころ}した時、与市は手で口を塞いで噛みつかれたのだろう。——ところが、噛み切られたのは右手の薬指だ。右手の指

を噛み切られながら、脇差で相手の胸を刺せるかい。——口を塞ぐのと胸を刺すのと一緒でなければ、徳五郎は大きな声を出した筈だ。この騒ぎを誰も知らなかつたところを見ると、下手人は二人に決つてゐる」

「——

ガラッ八は唸ります。

「口を塞いだのは与市だが、刺した人間は外にある。身代とお薦を手に入れた由兵衛に疑いはかかるが証拠は一つもない。そこで井戸の中に証拠の品があると言つて、由兵衛をおびき出し、古傷を洗つて白状さしたのさ。いやな術てだが、七年も経つちや、こうでもするより外に工夫はない」

平次は憂鬱そうでした。

「今晚まで由兵衛が下手人と判らなかつたんですか、親分ほどの人にも」

「由兵衛はこの古井戸に自分が殺した徳五郎の死体があるとは知らなかつた。——多分、金を貰つて死体を海へ捨てるよう頼まれた与市が、不精ぶじょうを極めて、徳五郎の身に着けた品だけ海に流し、死骸は由兵衛にも知らさずに、古井戸へ投り込んで、その上から壁土や雑物を投げ込んだんだろう」

「——

「由兵衛があんまり平氣なんで、少しも疑う気は起らなかつたよ。——知らぬが仏さ。もしあの古井戸に自分の殺した死骸があると知つたら、六年の間平氣で離室に住んだり、治郎助が井戸を掘るのを面白がつて見たりはしなかつたろう」

「成程ね」

「企んだ事はどんなに上手に隠しても判るが、知らずに暢氣に振舞う人間は疑いようがない。——何しろ嫌な事だつたよ」

平次は手柄顔もせずに、つくづくこう言うのでした。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵——萩 柚月

初出——「オール讀物」昭和十一年三月号 文藝春秋社

底本——「錢形平次捕物全集」第三卷 河出書房 昭和三十一年六月十五日初版

編集・発行 錢形俱楽部



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>